

月例研究会 (2007年3月28日)

新しい大人のための
公共哲学・試論

連帯の技法・社会関係資本・コモンズ

野村 一夫

私の研究テーマのひとつに社会構想論がある。『リフレクション』では、脱物象化の可能性を探り、知識過程の重要性、反省抑圧的コミュニケーションとしての権力作用、それに対する抵抗としての公共哲学としての社会学について論じた。『インターネット市民スタイル』では新しい公共圏としてネットの可能性に注目し、『インフォアーツ論』ではネットの言説世界の影を分析した後に、コモンズとしてそれを支える人たちの知的能力(インフォアーツ)を構想した。

これらの研究において主体として考えていたのは「見識ある市民」(のちに「眼識ある市民」に修正)である。シュッツに由来するこの主体概念は、知識の社会的配分に関して専門家でもなく素人でもない第三のありようを意味している。これをさらに社会・文化的な概念に展開したのが『未熟者の天下』である。ここでは「新しい大人」として議論を進めた。公共哲学としての大人論である。

大人とは何かを考えていくと、大人概念の自明性がすでに崩壊していることに気づく。とりわけ「成熟の幻想」を廃棄する必要がある。大人の社会的意味が変化しているのである。たとえば(1)年齢・世代(2)態度・意識(3)社

会的条件という三要素を考えても、従来想定されてきた社会化モデルはとれないだろう。

そういう大人が生きなければならない社会はリスク社会である。昨今の健康志向はリスク社会を生きる大人の意識の表れとして理解できる。つまり「問題状況としての身体」を原理とする生活態度である。しかし阪神淡路大震災の経験が物語るように、リスク社会を生きる上で必要なのが社会関係資本である。

社会関係資本という概念に関して重要なのは、トクヴィル『アメリカの民主政治』である。彼はアメリカで「連帯の技法」が発展していることを重視した。20世紀後半になってブルデューやコールマンやフクヤマらが問題にして定着したが、この議論で特に注目すべきがパットナムである。『哲学する民主主義』ではイタリアの地方分権を研究して、北部の州が南部の州よりも民主主義のパフォーマンスがよいことを立証し、その要因として社会関係資本の豊かさを指摘した。社会関係資本とは、信頼と互酬性の規範と市民的積極参加から構成される。これによって集合行為のジレンマが解消され、相互利益を生む協力が可能になっているというのである。

このような社会構想はコミュニタリアニズムと深い関係がある。コミュニティの力を強調するコミュニタリアニズムの主役は「新しい大人」である。組織や制度からなるシステムをずらし、自然環境・サイバースペース・社交的世界・文化的活動からなるコモンズ(みんなで自発的に協力しあって維持存続させている社会空間・公共空間)を構築できるのは彼らである。

(のむら・かずお 國學院大学経済学部教授)